

# おもしろ にいがた学

新潟方言・郷土史研究家 大田 朋子

## プロフィール

新潟市出身（出生地は柏崎市）  
東京で大学・研究室生活を経てUターン  
雑誌記者、コピーライター、ライター、インタビュアーの仕事をするうちに、方言や習俗、歴史に魅せられ、研究、普及につとめる  
心理学・新潟学等講師、経営学修士（MBA）  
著書「独断大田流にいがた弁講座」（新潟日報事業社）  
「おもしろ えちご塾」（恒文社）等

## 「寄り合い欠かすな 口利くな」

このタイトルを見て思わず「はい、その通り！」と思った方も多いと思います。これは、筆者が秘かに気に入っているうえに、新潟にいるときは人生訓にしたいとも思っている新潟人的ことわざです。

先般、某会にしぶしぶ、いえいえ、いそいそと足を運んだのですが、やはり「新潟時間」（4月号参照）で皆さん奥ゆかしい新潟人でありました。定刻15分遅れで始まったその会は、まさに「寄り合い欠かすな 口利くな」であり、ああ、昔の人はいいこと言うなあ、と思わず感心した次第です。

〇〇人気質という言葉があるように、気候・風土はその土地に住む人の性格にも影響することがあります。

昔から新潟県民の気質は「頼まれれば米搗きに」といわれるくらい<sup>こめつ</sup>こんじょよし（おひとよし）とされています。

この「頼まれれば米搗きに」は、よく「餅つきに」と思われているようですが、実はかつて全国的に活躍した越後杜氏の働きぶりや腕のよさを表現した越後のことわざです。雪深い地域の人たちにとっては、冬場の貴重な収入源が「出稼ぎ杜氏」でした。杜氏の仕事は重労働。黙々と仕事をこなす越後人は全国の酒蔵から珍重されていたといわれています。

まじめでこんじょよしの県民は「和」を重んじることを第一とします。参加するけど、余計なことは言わない方が角がたちません、ということで、「寄り合い欠かすな 口利くな」で会を進めていく

のです。ですから、「寄り合い出るけど、口も利く」では、「出る杭は打たれる」ことになりかねません。さらに「寄り合い出ないで（しかもこの場合は後から）口を利く」では、それこそおおごとになってしまいます。

以前ある会で、県外の人から、「新潟の人は、会議中はおとなしいけど、そのあとの懇親会では活発な意見が出る。会議中に言ってくれば良かったのにとすることがよくある」と言われたことがありますが、これこそ「寄り合い欠かすな 口利くな」としょうがりの性格ならではの県民気質かと思われま

す。会議中、おとなしく頷いていた人が、ひとたびアルコールか食料が入ると、緊張もとれ、本性発揮！ということもよくあります。そうなるこれは「ねっそり牛の壁破り」か「だんまり虫の壁破り」に大変身！おとなしいからといって、あなどれないのも特徴です。

文字にする勇氣はないのですが、「越後の連れ〇〇〇」（〇は小文字）という場合もありますから、やはり右ならえ！で「和」を大切にしようです。

「寄り合い欠かすな 口利くな」。しゃべっちゃこぎには耳の痛いことばですが、新潟人気質の奥深さが見えてきました。

